

地方都市内における地区特性を考慮した世帯構成変化とコミュニティとの関連分析\*  
Relative analysis in consideration of the characteristic between household composition change and a  
community in a local city \*

藤島 誉\*\*・青島 縮次郎\*\*\*・古澤 浩司\*\*\*\*・杉木 直\*\*\*\*\*

By Takashi FUJISHIMA\*\*・Naojiro AOSHIMA\*\*\*・Koji FURUSAWA\*\*\*\*・Nao SUGIKI\*\*\*\*\*

1. はじめに

我が国の地方都市圏では、モータリゼーションの進展と連動して、居住機能が郊外化していったことにより、中心部の人口密度の低下が起り、それが要因となり公共交通は衰退の一途をたどっている。また、郊外居住化自体も、通勤距離の増大、地価の安い郊外部での急速な団地開発などに伴う都市施設の整備不足など様々な問題を生んでいる。そのような問題に対して、財政が逼迫している地方自治体は適切な対応をとることができないケースも多いと思われる。

そのような背景のなか、こういった問題に対して住民サイドから解決を目指す動きが出てきている。実際そのような問題は住民が結束し、よりよい地域社会（コミュニティ）を形成することによって解決できることが少なくない。しかし、コミュニティがもつそういった機能に対して、未だに住民の一般的な評価や認知度、関心は高いとはいえない。

そこで本研究は、コミュニティの実態と居住する住民の住まい方との関連についての基礎的な知見を得ることを目的とし、地方都市を対象に同一都市内で異なるコミュニティの特徴を持つと思われる地区について自治会へのヒアリング調査、及び住民へのアンケート調査をした。そして、調査結果より世帯構成変化の特性、コミュニティの現状を把握し、それらの関連性について地区毎に比較、考察を行った。

\*キーワード：交通弱者対策、高齢者居住、

\*\*学生員、群馬大学大学院工学研究科

(〒376-8515 群馬大学桐生市天神町 1-5-1

TEL : 0277-30-1650、FAX0277-30-1601)

\*\*\*フェロー、工博、群馬大学工学部建設工学科教授

\*\*\*\*学生員、工修、群馬大学大学院工学研究科

\*\*\*\*\*正会員、情報修、群馬大学大学院工学研究科助手

2. 調査概要

(1) 対象地区の選定

本研究ではモータリゼーションと、都市の郊外化が高度に進展した地方都市である、群馬県前橋市を対象地域とした。その前橋市において都心部からの距離と土地利用状況の違いを考慮して、以下のよう

にゾーニングを行った。  
都心部から既成市街地にかけてのゾーン  
近郊部（都心部から4～6km）農村集落ゾーン  
遠郊部（都心部から6km以遠）農村集落ゾーン  
既成市街地周辺部の主に土地区画整理事業地のゾーン

近郊部（都心部から4～6km）住宅団地ゾーン  
遠郊部（都心部から6km以遠）住宅団地ゾーン  
また、対象地区の選定結果を図1に示し、その地区特性を表1に示す。

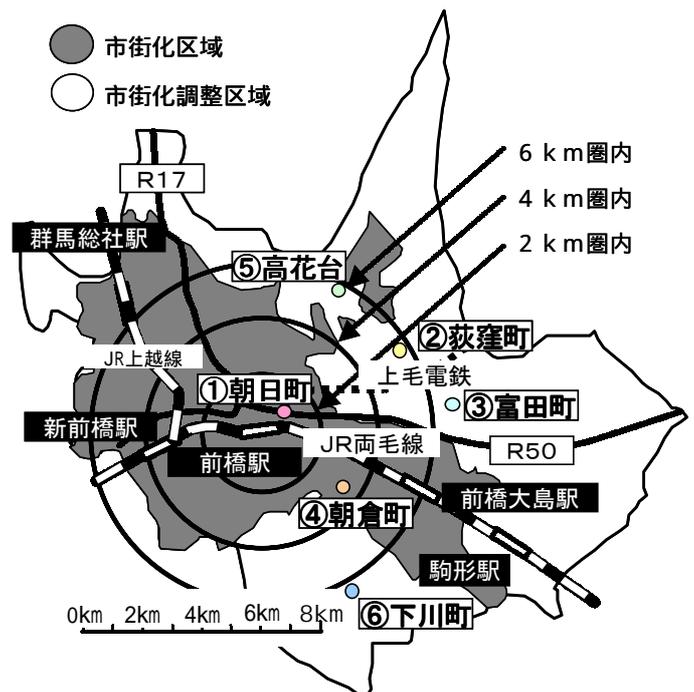


図1 対象地区の選定結果

(2) 調査概要

ヒアリング調査概要を表2に示す。ヒアリング調査では対象地区の現状を把握するため住環境、とりわけ交通環境の実態とその評価、及び高齢化の進行やコミュニティの成熟度に関する質問を行った。

次に、アンケート調査概要を表3に示す。アンケート調査の配布方法はお願い文を印刷した封筒に世帯票1票と返信用封筒を封入したものを自治会を通して配布、郵送回収をした。アンケート内容は世帯構成と住環境評価、自動車同乗の実態などとなっている。

3. 自治会ヒアリング調査結果

ヒアリング調査結果を表4に示す。今回のヒアリング調査では自動車を利用できない高齢者の外出の不便さが最も深刻な問題として挙げられた。特に地区、地区では公共交通を利用したくとも利用しにくい環境にあることが分かった。しかし、地区と都心からの距離が同程度である地区では外出しにくいという意見は出されなかった。その理由としては地区は住宅団地として整備され、交通環境が整っていたことと、まだ本格的な高齢化が訪れておらずほとんどの人が自分で運転できるためだと考えられ、郊外部が必ずしも不便であるとはいえないということが分かる。また、地区、地区では交通の便は悪いものの親族が周辺に住んでいるため、自動車の同乗交通で外出手段を補えていることが分かる。それに対して、地区では周辺に親族がいる世帯が

表1 対象地区の地区特性

		都心から4km以内(近)	都心から4~6km以内(中)	都心から6km以上(遠)
旧社会	地区	朝日町3丁目	荻窪町	富田町
	区域	市街化区域	市街化調整区域	混在
	世帯数/人口	590/1408	428/1361	440/1641
	年少人口比率	14.6	13.2	13.2
新社会	地区	朝倉町3丁目	高花台1丁目	下川町
	区域	市街化区域	混在	市街化調整区域
	世帯数/人口	700/1736	295/925	713/2334
	年少人口比率	17.0	8.9	9.5
	高齢人口比率	22.7	18.1	20.0
	高齢人口比率	17.7	9.8	9.8

表2 ヒアリング調査概要

調査対象	各自治会の会長および役員 またはそれらに準ずる方
調査時期	2001年10月~11月
調査地域	群馬県前橋市を6ゾーンに分け、 そのゾーン内の1自治会を抽出
質問項目	1) 地区の少子・高齢化や住まいの状況について 2) 地区の交通状況について 3) 地区の交流状況や自治会活動について 4) 自治会による福祉、自動車同乗の支援活動について

表3 アンケート調査概要

調査対象	各調査地区の世帯	
調査時期	2001年12月~2002年1月	
調査地域	ヒアリング調査と同地域	
地区	配布数	回収率(%)
	590	18.98
	700	14.71
	428	18.93
	295	31.19
	440	30.91
	713	23.00
総計	3166	22.95

表4 自治会ヒアリング調査結果

	都心から4km以内(近)	都心から4~6km以内(中)	都心から6km以上(遠)
旧社会	地区 朝日町3丁目 ・50号の北側は区画整理が一部進められているが、南側は古い既存住宅地が広がっている ・南側の高齢者の割合は40%	地区 荻窪町 ・近所に親族が多いため生活に不便が少ない ・既存宅地制度等によりバラ建ちスプロールが見られる ・一度家を離れた次・三男が戻ってきて同敷地内に家を建てている	地区 富田町 ・近所に親族が多いため生活に不便が少ない ・既存宅地制度等によりバラ建ちスプロールが見られる ・一度家を離れた次・三男が戻ってきて同敷地内に家を建てている
	地区 朝倉町3丁目 ・最初の区画整理後昭和34~61年の間、長時間をかけて団地整備 ・段階的に入居が進んだ	地区 高花台1丁目 ・昭和49~59年にかけて団地整備 ・整備された地区から入居 ・建ぺい率が低いため二世帯居住は難しい	地区 下川町 ・昭和55年前後に団地整備 ・整備された年に一斉に入居 ・自治会が主体で交流の少ない高齢者のために高齢者同士のふれあいの場として利用できる施設を設けている

少なく、近所同士の同乗交通の場合、事故発生時の責任問題が懸念されることもあり、同乗交通は地区、ほど行われていない。

コミュニティの成熟度に関しては、全地区に共通して祭りなどの催し物、老人会、子供会などの活動は活発に行われているものの、普段の近所付き合いはあまりなされていなかった。しかし、組長が頻繁に交流する機会を設けるなど近所付き合いに積極的な姿勢がみえるところでは付き合いが活発であるとの意見もあり、リーダーが活躍することで近所付き合いを促進できることが分かった。また、郊外部では病院への送迎や高齢者が交流する場を設けるなど、生活の不便さを補うためのボランティア活動が行われていたが、都心部では生活に不便さを感じるものが少ないためか、そのような活動はなされていなかった。

#### 4. 世帯構成変化の特性分析

各地区の世帯構成変化の傾向を探るため、1980年から2000年までの世帯構成分布の推移を図2に示す。全体として高齢者有り世帯が増加傾向にあるなかで地区では変動がみられない。これは、地区では、最近、土地区画整理事業が進められていて若い世帯が転入してきている北側と、既成市街地からなる南側とに分かれていて、異なる特性をもつ2区分が存在するためであり、南側では急速に高齢化

が進行している。

また、遠郊部の農村集落である地区は、表1に示すとおり平均世帯構成員数が最も多く、図2をみても高齢化、核家族化の傾向が最も低い。これは古くから居住している世帯が多く、敷地面積が比較的広いことと、地元意識が強いという農村社会の特徴により子世代の転出が少なく、また、一旦転出しても、後に再び転入してくる傾向が強いためである。

地区では、2、3世代同居世帯から夫婦世帯に変化していく様子が顕著に表れており、高齢夫婦世帯が急増している。これは団地開発時に同年代の世帯が一時に集中して入居したため、団地開発から約20年が経過した現在では、子世代が一斉に独立しつつあることによるものと考えられる。今後も、特に郊外の住宅団地における高齢化が続き、高齢夫婦世帯がより一層増加していくと考えられる。

#### 5. コミュニティの特性分析

各地区のコミュニティの特性を把握するため、高齢者有り世帯の世帯構成別に表した住民の付き合いの対象とその程度の関連を図3に示す。図の値は「良く付き合っている」、「時々付き合っている」、「あまり付き合っていない」、「全く付き合っていない」の4段階に評価した付き合い頻度にそれぞれ“3”，“2”，“1”，“0”の重みをつけ、それを平均化したものである。

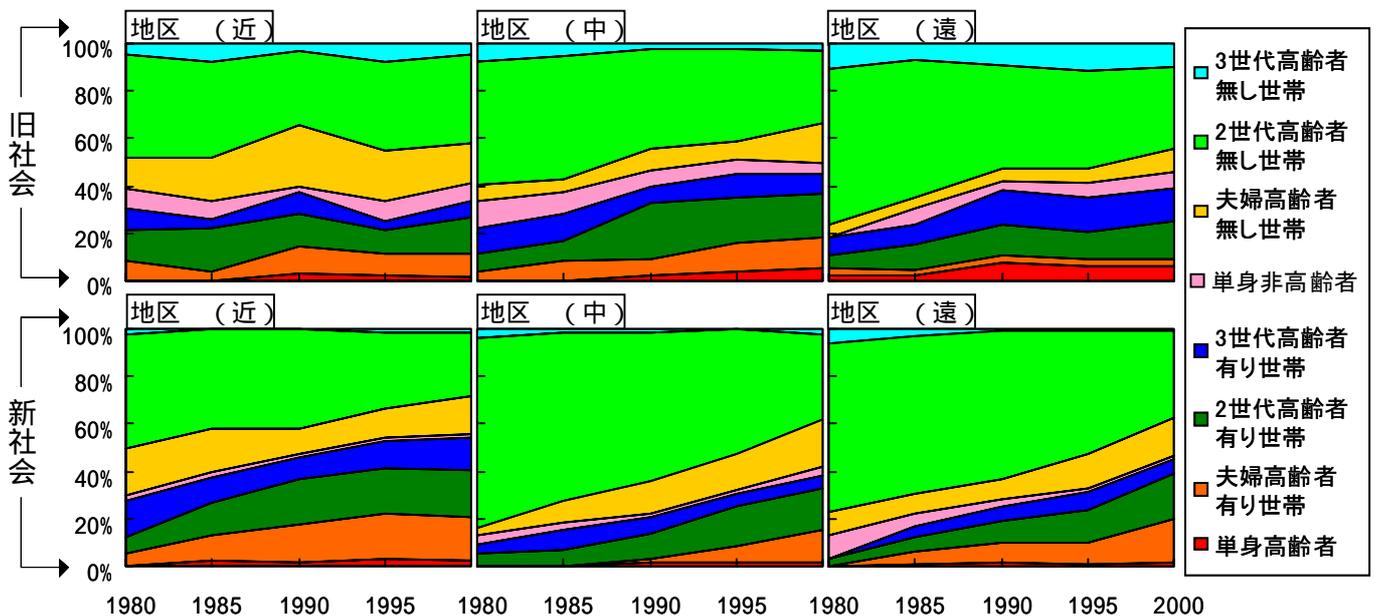


図2 高齢者有り・高齢者無し別世帯構成の推移

まず、別居家族について見ると全地区において良好な付き合いが行われていることが見て取れ、地区による別居家族との付き合いの差異はないといえる。これに対して、親戚については別居家族と異なり、旧社会の地区、は新社会の地区、よりも良好な付き合い状況を示している。特に近所に親族が住んでいる世帯が多い地区、において良く付き合う傾向にあることから、付き合い状況は距離に依る影響が強いと考えられる。

次に、隣近所について見ると他の対象に比べ付き合い頻度が少なく、近所付き合いの希薄さを示す結果となっている。特に都心部の地区、都心部周辺の地区はあまり付き合いがないことが見て取れる。これは市街地に居住する住民ほど不便さを感じることが少なく、地域社会への無関心さを拡大する傾向にあるためと考えられる。特に地区では前章で述べたとおり、南側の既存住宅地は高齢化、核家族化の進行が著しいため、他世帯とのつながりが出来にくく、若い2世代同居世帯が多い北側と比べ付き合いが希薄であるといえる。

次に、隣近所について見ると他の対象に比べ付き合い頻度が少なく、近所付き合いの希薄さを示す結果となっている。特に都心部の地区、都心部周辺の地区はあまり付き合いがないことが見て取れる。これは市街地に居住する住民ほど不便さを感じることが少なく、地域社会への無関心さを拡大する傾向にあるためと考えられる。特に地区では前章で述べたとおり、南側の既存住宅地は高齢化、核家族化の進行が著しいため、他世帯とのつながりが出来にくく、若い2世代同居世帯が多い北側と比べ付き合いが希薄であるといえる。

また、地区、では前章で述べたとおり団地開発時に同年代の世帯が一時に集中して入居したという背景があるため、現在では子世代が一斉に独立してしまい高齢夫婦世帯の割合が急増している。それにも関わらず、比較的良好な付き合い状況を示しているのは、同年代の世帯が多いため子供を通じての付き合いが起り易く、その付き合いが、子供が独立した後も続いていること、そして、それだけではなくその付き合いをベースとして高齢期を迎えたところ、郊外居住の不便さを感じて住民同士が積極的に近所付き合いをし、互いに助け合う世帯もあるといったことなどが考えられる。

## 6. おわりに

本研究は各地区のコミュニティの必要性、発展の可能性を明らかにするための基礎的な知見を得るため、各地区の現象分析を行った。

ヒアリング調査結果により、働き盛りの非高齢者の場合、生活に不便さを感じるものが少なく、職場や家庭を重視し地区との付き合いを軽視する傾向にあることがわかった。今後、このような世帯が高齢期を迎え、地域社会に無関心な高齢者が増加するのが懸念される。その対策として、住居の改善、施設整備などにより住環境を向上させ、子世代との同居を誘導することで、他世帯とのつながりを増やし、コミュニティを成熟させることや生活の不便さを解消することが必要である。

今後は今回得られたことを元に各地区の問題の軽減、解決を目標として、如何にコミュニティを形成し、どのように問題を解決していくのかを考える必要があり、そのために地域住民に対してコミュニティの形成の合意を得るためのシステムを検討していくことも必要である。

### 謝辞

本研究は(財)ユニバーサル財団より研究助成を受けている。ここに記して感謝の意を表したい。

### 参考文献

- 1) 大石亜希子：日本の人口推計、高速道路と自動車、第44巻、第11号、2001

	地区 (近)	付き合い対象			
		別居家族	親戚	友人	隣近所
旧社会	単身世帯	3.0	1.5	2.2	0.8
	夫婦世帯	2.2	2.0	2.1	1.3
	2世代世帯	2.7	2.3	2.6	1.7
	3世代世帯	3.0	2.8	2.8	1.6
	地区 (中)				
	単身世帯	3.0	2.3	2.0	2.5
	夫婦世帯	2.7	2.1	2.4	2.2
	2世代世帯	2.5	1.9	2.2	1.8
	3世代世帯	3.0	2.5	1.7	2.7
	地区 (遠)				
	単身世帯	2.2	2.0	2.3	1.8
	夫婦世帯	2.9	2.0	2.2	2.1
2世代世帯	2.9	2.1	2.2	1.9	
3世代世帯	3.0	2.5	2.6	2.4	
新社会	地区 (近)				
	単身世帯	2.0	2.0	2.0	1.7
	夫婦世帯	2.7	1.9	2.1	1.4
	2世代世帯	2.7	1.8	2.1	1.9
	3世代世帯	-	1.0	2.0	2.0
	地区 (中)				
	単身世帯	2.5	1.5	2.3	2.0
	夫婦世帯	2.6	1.9	2.1	2.0
	2世代世帯	2.5	1.8	1.7	1.7
	3世代世帯	3.0	3.0	3.0	3.0
	地区 (遠)				
	単身世帯	2.8	2.3	2.0	2.3
夫婦世帯	2.6	2.2	2.0	2.2	
2世代世帯	2.6	1.9	1.9	1.9	
3世代世帯	3.0	2.0	3.0	2.0	

図3 高齢者有り世帯についての対象別付き合い状況